

## 『日本の悲劇』を観て

メディアプロデュース学部 准教授 森井 マスミ



小林政弘監督『日本の悲劇』が公開中である。題材になったのは、二〇一〇年七月、父親の年金で生活を支えていた長女が、その死後も年金を不正に受け取っていた事件だ。約三十年を経過してミイラ化した遺体は、世間を驚かせた。生きていれば百十一歳。家族は、父親が「即身成仏したい」といつて自室に閉じこもったと説明した。

現在、年間の自殺者は約二万八千人、非正規雇用率は五〇パーセントを超えている。マスコミは「無縁死」や「就活自殺」を報じ、鬱病患者は一〇〇万人にのぼっている。学生たちが出ていく社会の現状である。映画では、長男はリストラで鬱病を患い、介護のために実家に戻り母を看取る。一方末期の肺癌を宣告された父は、仕事が見つかるまでは、自分が死んだことは誰にも言うなと告げて、餓死を覚悟で部屋に引きこもる。全国で百歳以上の高齢者は、約四万人。同様の事件は跡を

絶たない。実際の事件では、世間の批判は長女に向けられた。しかし映画はそこに〈祈り〉を見出し、極限状態の家族が、その果てに選ばざるを得なかった究極の愛の形として事件は描かれているのである。

ところで『自然居士』や『隅田川』など、中世の謡曲や御伽草子には「人買い」を主題にした作品が多い。親の菩提を弔うために身を売った子や、拐かされた子を探して狂女となった母親の姿がそこには描かれている。しかし中世の文書を見れば、それが虚構でしかないことがわかる。なぜなら残されているのは、金銭を得るために親が子を売った記録だからである。ではなぜそのような虚構が必要だったのか。子を売ることではか生きていくことができないうぎりぎりの状態にあって、ひとはその罪悪感を虚構によつてなぐさめたのではないか。『日本の悲劇』では、父が自らを売り、子がそれに荷担したが、そこには実際の事件にはないうぎりぎりの現実が生んだ虚構がある。そしてそこには時代を超えた家族の〈祈り〉がある。現実が過酷なればこそ、学生たちには、新たな〈祈り〉を見出してほしいと願うところである。